



サンワチャンネル

令和7年1・2月号



明けましておめでとうございます。
旧年中は格別にご高配を賜り、まことにありがたく御礼申し上げます。
本年も、より一層のご支援を賜りますよう、職員一同心よりお願い申し上げます。

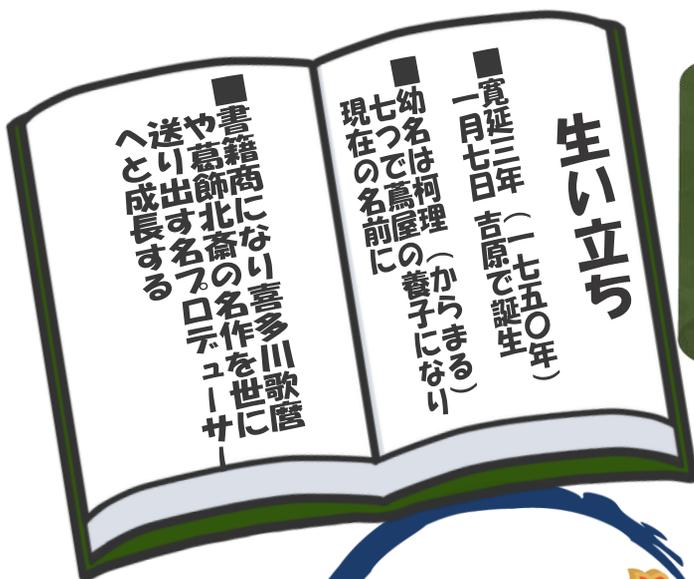


2025年(令和7年)大河ドラマ

「べらぼう ～ 蔦重栄華乃夢噺～」



時は江戸時代、茶屋と貸本屋を営んでいた蔦屋重三郎(つたやじゅうざぶろう)がこの物語の主人公です。客足が遠のきつつある吉原を活気溢れた町に蘇らせるべく版元となり奮闘します。書店経営を通じて人々が求める書物とは何か、プロフェッサーの役割を担い、多くの天才絵師たちの才能を開花させ江戸のメディア王と呼ばれるまでが描かれています。



江戸にも存在した
レンタル業

本の値段が高かった江戸時代、庶民が本に触れるのに最も身近な存在だったのが貸本屋でした。文化5年(1808)の記録では150万人近くが住んでいた江戸には、約650人の貸本屋がいたと言われています。

浮世絵ができるまで

蔦重は浮世絵の全盛期を築き上げた人物としても知られており、浮世絵の制作から販売までを統括する重要な役割を担っていました。当時は木版画だったため大きく以下の3分野の職人が必要でした。

- ① 絵師
- ② 彫師
- ③ 摺師(すりし) ← 彫った木版に塗装し、紙に摺りつける

版元は職人との意思疎通を図りつつ作品の企画や販売も行うため、今でいうところの出版社のような立ち位置に属していました。

2つの意味

べらぼうの語源

- ・笹棒(へらぼう)……飯を食うだけの役立たず、穀潰し(こくつぶし)
- ・便乱坊(べらんぼう)……滑稽な様子で人を笑わす芸人の呼び名、やや馬鹿にしたような意味で使われていた
罵る意味で使われていましたが、のちに江戸っ子の間で「桁外れなこと」「常識から外れたこと」という新しい意味で使われるようになり、それが浸透したと言われています。